2021年度　前期

個別学力検査

国　　語

注意事項

1. **試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。**
2. 問題冊子は24ページあります。解答冊子には解答用紙5枚が綴じられています。
3. 試験時間は90分間です。
4. **すべての解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください(氏名は記入しないでください)。**
5. 問題冊子と解答冊子に印刷不鮮明や落丁などがある場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
6. 試験中に気分が悪くなったときは、手を挙げて監督者の指示に従ってください。
7. 問題冊子は試験終了後に持ち帰ってください。**ただし、無断で複写、複製、転載などを行うことはできません。**

個別学力検査

国語

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国語の解答はすべて解答用紙に書くこと。

第一節

ファッションという言葉は、実につかみどころがない。ファッションという名の具体的な物があるわけではないし、何かしら特定の行為を指しているわけでもない。自分の所有物をすべて目の前に並べてみて、ファッションと非ファッションに分けてみたり、一日が終わる前に、その日の行いをすべてリストアップして、ファッションと呼べるものとそうでないものに分けてみることは、とても面白い実験にはなるだろうが、ほとんど頭の体操やゲームの領域である。鳥類とホニュウ(あ)類に分類するとか、食器と家具に分類するとか、職業とヨカ(い)に分類するといったこととは大きく異なる。

ファッションと同じような領域で、同じように曖昧な言葉に「デザイン」があるが、デザインは、もう少しわかりやすいかもしれない。デザインは通常、「それは良いデザインである」や「デザインが悪くて怪我をした」のように、物体の形状や姿を指す言葉として使われるか、もしくは「そのペンは、私がデザインしました」のように、物体の形状や姿を決定(i)する行為として使われるかのどちらかである。もちろん最近では、「ライフデザイン」「キャリアデザイン」「コミュニティデザイン」など、目に見えない趣味や計画や関係性に対しても、比喩的な意味合いを込めつつ使われることが多い。しかし、その場合においても、作られた対象や、それを決定する行為という意味で使われていることに変わりはない。

では、デザインと比べて、ファッションはどうであろうか。「それは良いファッションである」というのは、ぎこちない言葉ではあるが、かろうじて言いそうではある。おそらく日常会話では、「素敵ですね」とか「かわいいですね」で済ませてしまうだろうが、「良いファッションですね」で意味が通じないわけではない。もし「素敵なファッションですね」という言い方をすれば、ほとんど違和感はない。

しかし、「良いファッション」はいいとしても、「悪いファッション」という言い方はするだろうか。「悪いデザイン」という言い

方ならば、使用目的と機能と形態があっていないときに使われることが多い。人の手には小さすぎるスプーンや、硬すぎる椅子を指して、「悪いデザイン」と言うことはある。ファッションに関しても、ひょっとしたら「ファッションが悪くて恥をかいた」というような言い方ならするのかもしれない。つまり、格好が悪いとか、場違いであったという意味で使われることがないとも限らない。話者同士が、お互いに状況を認識し、(う)ゲンガイに何かしらの価値観を含ませるのであれば、意味が通らないこともないだろう。

では、「私がファッションしました」という言い方はどうだろうか。さすがに、これはどう頑張っても、意味のわからない言い方ではないだろうか。「私がデザインしました」という言い回しが、特に説明なく意味を成すのとは対照的である。

「デザイン」の語源はラテン語の designare で、それは「デッサン」と同じ語源でもあり、「計画する」という意味がある。かたや「ファッション」の語源は同じくラテン語の factiō で、「完成させる」という意味がある。現在のデザインという言葉が、物ができあがる瞬間までの事前の準備や、その結果としての姿形を意味し、ファッションという言葉が、作られた衣服やアクセサリーを使いこなすことや、それらを組み合わせることで見た目を形作っていくことを意味していることを考えると、デザインとファッションの語源と現在のあり方に共通するところがあって、非常に興味深い。つまり、物ができあがる瞬間を境界線として、その前までが「デザイン」で、その後が「ファッション」という現在使われている区分けが、「計画する」と「完成させる」というラテン語の意味と、うまく対応しているのだ。

もちろん、デザインやファッションといった言葉は、日本語と英語では微妙に意味が異なるし、同じ日本語や英語でも一〇年二〇年経てば簡単に意味を変えてしまうだろう。日常言語としてこれだけ定着し、生活の中で生きた言葉として日々使われているものに対して、本当はこういう意味なのだと断定して使用を制限することは、ある種の学問的暴力と言える。辞書はあくまでも記録であって、予言書ではない。語源を探って何かわかったようになるのは、(ア)大概にした方がいいだろう。むしろ、こういう言葉は、日常で使われているところを、ちょうど昆虫採集でもするように捕まえて、意味を探っていかなくてはならないものだ。そういう意味では、「悪いファッション」や「私がファッションしました」という使い方に、なぜ違和感があるのかを考えてい

くことは、とても重要である。

「悪いファッション」という言い方に違和感があるのは、ファッションに良し悪しという考え方がそぐわないからであろう。流行と深く関わるファッションにおいては、価値の体系が常に入れ替わる。価値があるかどうかは、それが流行しているか、もしくはこれから流行する見込みがあるかで決定され、昨日流行の最先端だとされていたものが、簡単に今日は流行遅れとされて価値を(え)ソウシツする。だが、「良い」や「悪い」という物差しは、これから先も揺るがない普遍性を指す言葉である。

あ、ファッションには「悪い」という考え方は馴染(なじ)まないのだ。

かたや「私がファッションしました」という言い方に違和感があるのは、ファッションが、人々の行為が集まって引き起こされる社会現象、という意味で使われることが多いからだろう。ファッションは、無秩序な行為の集積ではなく、大勢の人々が、ある方向性に従って行動することの結果であり、それがまた次の行為に影響を及ぼすような社会現象である。

フランスの社会学者エミール・デュルケームは、誰かに命令されているわけでもないのに、私たちが社会から行動や考え方を(ii)強制されるのは、社会には「集合意識」があり、それが個人に働きかけるからだと説明している。デュルケームによれば、「同じ社会の成員たちの平均に共通な諸信念と諸感情の総体」が、「固有の生命を持つ一定の体系」として形成されたものが、集合意識である。つまり、同じ傾向を持った人々が集まることで、その中での平均的な思考や感覚が、個人個人の外部に、一つの意志として、生きているかのように実体化されてしまい、それがまた個人に対して同質化を要求してくるというのだ。

社会現象としてのファッションは、まさしくその集合意識が、目に見える姿で現れたものである。「私がファッションしました」という言い方に違和感を覚えてしまうのは、ファッションが、個人の意思を超えた水準で決定されていることに、多くの人が気がついているからであろう。

第二節

ファッションのつかみどころのなさは、個人的な行為を指す言葉でありながら、一方で、流行という社会現象を示す言葉とし

ても使われるところに起因している。ファッションについて学術的な文章が書かれるようになって以来、こういった語義の曖昧さをめぐって、(A)ファッションとは行為なのか現象なのかという議論が、常に繰り返されてきた。言い換えると、ファッションとは人間の主体的な行為を指す言葉なのか、それとも社会全体の意思を反映した現象なのか、という問いである。

ファッション研究のはじまりがどこにあるのかは諸説分かれるが、一九世紀の二人の学者、ガブリエル・タルドとギュスターヴ・ル・ボンが、その後のファッション研究の(お)イシズエを築いたとすることに対して異論は少ないだろう。この二人はかたや「模倣」という比喩を用いて、かたや「感染」という比喩を用いて、ファッションを説明しようとした。

模倣は本人の意志がなければできないことであり、感染は本人の意志とは無関係に巻き込まれてしまうことだ。つまり、みんなが(か)マネするから流行が起こるという説と、知らぬ間に同調してしまうという説の二つが、近代社会のはじまりのファッションが現れた時期からあったのだ。行為か現象かという議論は、この時からすでにはじまっている。

この二つの考え方が並び立つのは、特に不思議なことではない。というのも、この二つの考えは、近代における個人とは何かについて理解しようとするときに起こる対立と同じだからだ。すなわち、人間には「主体性」と呼べるような何かがあるはずだという考えと、「主体性」と思っているそれは社会の構造によって決定されたもので、人間には個性や意思なるものはないという考えの対立だ。それは、人間は各人の絶えざる努力によって人間になるとする実存主義と、人間の行動や感情は社会のあり方とその人の社会的位置によって決まってしまうとする構造主義をめぐる、思想的な対立と同じでもある。

確かに、［　a　］どれほど芸術性が高く個性的な文学作品があったとしても、それが書かれた言語まで作者の発明であったとしたら、誰も感情を移入して読むことなどできないだろう。そして、多くの人が指摘しているように、言語は個人の考え方を支配する力を持っている。あらゆる考え方は、言語によって規定されており、その枠の中でしかオリジナリティを持つことはできない。言語という借り物なしには何もできないのに、そこに「主体性」なるものを認めていいのか、という疑問はもっともである。しかしそうは言っても、実はあなたには主体性などまったく無いのですと言われて、いったい誰が納得しようか。

人間は、言語によって自分を語るのと同様に、衣服や装飾品によっても自分を語る。小説のような作品や、日々のおしゃべり

と同じように、ファッションは、主体的な行為としても、社会に共有された考え方が個人を通して発露した現象としても捉(イ)えることができる。ファッションを考えることは、言語を考えることと同様に、私たちひとりひとりに、個性と呼べるような特殊性があるのか、主体性と呼べるような自由な意思と行動の力があるのかを問うことでもある。

一人の人間が、その日に着ている服には、さまざまな社会的な力が作用している。私たちの社会の常識から考えると、人は、性別と年齢に従って服を選ぶだろう。入社二年目を迎えるＯＬが、これから先輩になる自分の気を引き締めようと、男性用のスーツを買うことは検討しないし、家族揃(そろ)っての食事に出かける時に、仲の良さを確認するために、妻とお揃いのスカートを穿(は)こうと手を伸ばす男性もいないだろう。

私たちは、それを主体的な選択だと思い込んでいるが、その人の所属する社会が、どのような政治的、経済的な特徴を持っているかによって、選ぶ服は大きく変わってくる。国の経済規模や、その国の社会が保有している技術レベルによって、手に入れられる服も違う。政治と宗教が分離しているかどうかや、女性の社会的地位、伝統的な習慣との距離によっても違うだろうし、その伝統的な習慣を形作るのに大きな役割を担った気候や植生などの、地理的な条件によっても違ってくる。さらには、その社会のマスメディアやパーソナルメディアのあり方によっても違いは出てくる。あるいは同じ社会の中にいても、その人の社会的地位や収入によって、手に取る服は異なるだろう。

しかし、だからといって、人間が素直に社会から期待される役回りを演じ、それにふさわしい服を選ぶとも限らない。資産や地位や年齢や性別に見合わなくても、その人が自分の生きていく信条にふさわしいと考える服を、社会的圧力に逆らって選択するのは、ありえる話だ。それを主体的な行為と呼ぶかは別にしても、少なくとも、自分に何がふさわしいのかと考え悩むことを、主体的な行為ではないと断言することはできないだろう。

第三節

ファッションは、まず、アイデンティティとコミュニケーションの問題として整理することができる。ファッションについて

考えるとき、この二つは切り離して論じることはできない。ファッションとは、その人が誰であるかについてのイメージをコントロールする技術であり、コミュニケーションを成立させるための技術である。

自分が誰であるかを、互いに視覚的に伝え合うことがファッションであるなら、伝えるべきアイデンティティがなければ、コミュニケーションはそもそも起こらないはずである。しかし一方で、伝えたいことがなかったとしても、「意識しているいないにかかわらず、そして好むと好まざるとにかかわらず」、その人が誰なのかを伝えてしまうのが、ファッションである。歴史学者のロバート・ロスが言うように、私たちは、衣服を選んで(ウ)袖を通すことが、「投票や暴動のような政治的行為」になるとは思ってもいないのに、(B)衣服が「いやおうなくアイデンティティを表明」してしまうので、どのような服を着たところで「必然的に政治的行為」をとってしまうのだ。

積極的であれ、仕方なくであれ、ファッションは物を使って自分が誰であるかを語ることである。デザイン評論家の柏木博が指摘するように、およそすべてのデザインされた工業生産品は、「わたしたちが外界にかかわっていくための、ひとつの根源的なメディア」である。そして、自分を語る物の中では、衣服が最も重要な役割を果たしている。というのも、自分が誰であるかを伝えるときに、［　い　］、相手が誰かを知るときに、何よりも身体が、最も重要なメディアとなるからだ。心理学者のセイモア・フィッシャーが述べているように、「自分自身を着飾るときは、ある意味で、われわれは自画像をつくっている」のだ。

社会学者のアンソニー・ギデンズによれば、アイデンティティとは「時間と空間にわたる継続性」を前提にしながら、「生活史という観点から自分自身によって再帰的に理解された自己」のことである。簡単に言ってしまうと、生きている中で変わることがないと思える自分らしさのことだ。しかし、この定義とは異なり、ファッションによる自分語りは、時間とともに変化していく。常に自画像は、描き変えられ続ける。

人は、一着の服では自分を語りきることができない。学生や労働者としての自分、夫や妻としての自分、女性や男性としての自分など、誰であれ複数の自分を持っている。日々、その場の自分にふさわしい服を着て、自分の違った側面を語る。そして、自分の心の中に抱いている自分自身のイメージを確認するために、服を着ては姿を確認する。

そして、その姿に満足を覚えても不満に思っても、次の日には違う服を着なければならない。毎日、二十四時間、まったく同じ服を着て過ごすことは、現代の社会では難しい。すると今度は、どの服を着たところで、自分を上手く語れなくなってしまう。自分にはいろんな面がある、いろんな可能性があると思って、多種多様な服で自分を語るうちに、自分のすべてを語ることができる服が何ひとつなくなってしまい、自分でも自分が何かわからなくなってしまう。

［　う　］物で自分を語ろうとなどしなければいいのだが、精神科医の大平健が『豊かさの精神病理』で、所有する物を並べることでしか自分を語れない人たちを描いたように、現在の社会では、物でしか自分を語れないような状況に、多くの人が置かれている。しかし多木浩二も指摘するように、物が「言語や所作(ii)よりも深層の世界、意識化できない世界」を形作っているのも確かである。物でしか自分を語れないからといって、それが貧相(iii)な世界とは言えない。

(C)そういった状況を説明するのに、「フェティシズム」という言葉がしばしば使われるが、物への愛着や、物で自分を語ろうとすることとフェティシズムは、正確には無関係だ。フェティシズムは、もともと人類学の用語で、「呪物崇拝」と訳される。呪符やトーテムのような物を聖なる存在として崇拝(iv)するという、宗教の一形態を指し示す用語だ。そこから意味が広がっていき、カール・マルクスによって、商品を崇拝の対象にする「商品物神」としての意味が与えられ、また心理学者たちによって、本来は性的なものではない物が性の対象として扱われる状態を指すようにもなった。

ファッションは、どちらの意味とも関係が深いが、フェティシズムは、性的対象が人間から分離して物にのみ注がれた病的な態度だと捉えられており、そこが、どんなに物にこだわっても身体が不在だと成立しないファッションとは違うところである。むしろファッションは、フェティシズムの対象となるような物(1)に付着した意味ですら、所有者の属性へとすり替えてしまう技術なのだ。

第四節

人間には、自我が存在していると言われている。人間は、自分は人と比べておかしくないか、人と比べて劣っていないかと

いったことで不安になるが、自我が存在していると思っているばかりに、大勢の中に埋没していないか、自分にしかないものが自分にはないのではないかといったことでも不安になる。人と違っていても、同じでも、いずれ不安に思うのだ。

［　え　］、人と比べておかしくなく、かつ、人と違っているはずの自我は、直接見ることができない。鏡を見ても、そこに映るのは顔であり、体であり、自我そのものではない。それでも、鏡に映っている自分を見て、確かに自分が実在していることを確信して、その外見と同じように、その中には、他者とは違う個性があると納得しようとする。

そのため現在の社会では、見た目に強く個性が求められることになる。だが個性を示すのは困難であり、それでいながら、あまりにも周囲とかけ離れた身体イメージを形成すると、周囲と同調しない非常識な人間だと非難され、当人も周囲と違っていることに不安を覚える。(オ)匿名性の高い人々に囲まれている近代社会では、見た目によって自分が誰であるかを伝えなくてはならず、どこかにアイデンティティの帰属先を持ち、それに従って、他人が理解可能なように見た目を作っていかなくてはならない。ナショナリズムやジェンダーといったわかりやすいアイデンティティの規定なくして、生きていくことが難しい理由の一端もそこにある。

自分自身による自分自身へのまなざしは、同時に他人からのまなざしでもあり、他人から見られていることを確認するまなざしでもある。フィッシャーは、人々が「自分の身体についての内なる不安感」を解消するために、「他者に見られることによって身体についての確かな情報を求めている」と述べている。実際と仮想の視線を感じることによって、自分の身体の(き)リンカクを確認し、外縁を(ｖ)強化しているのだ。

それはつまり、見た目がものを言うということでもある。他者を理解しようとするときには、語り合うことが重要だとされてはいる。それは、言葉こそが人と人を理解させ結びつけると信じられているからである。だが、自分のことを自分に向かって言葉で説明して自分を理解できた、などという話は聞いたこともない。言葉によって自分自身を理解することができないのに、言葉によって他者を理解することなどできるものだろうか。自分が誰であるかを、言葉によって他者に説明できるのであれば、自分に対しても、他者に説明するように言葉によって説明できるはずである。しかし、そんなことは、とても無理なことであろ

う。言葉によって自我が確認できないのであれば、言葉によって他者を理解することができるかも怪しいものだ。

それゆえに人間は、自分自身を見た目で確認するようにして、他者も見た目によって判断する。そして自分に対しては、姿形を制御することによって、自分の存在を作りあげようとする。表情や仕草だけでなく、化粧や刺青をはじめとした身体加工、さらには衣服も、自分を作り上げる手段である。それは、ファッションに特別関心がある人に限ったことではない。強く意識しようがしまいが、(D)表情も、仕草も、身体も、衣服も、すべての人が、その扱いに熟練しないわけにはいかないのだ。

第五節

自分自身の姿を(く)シコウサクゴしながら探している現代人にとって、次から次へと新しい身体像を提案してくれる流行の服は、とても役に立つ。とはいえ、高くて良い物なら自分を良く語ってくれるはずだと思ってブランド品を持っても、自分より有名なブランド品が、自分のことを語ってくれるはずはない。高くて良くなるほど、(E)物が自分に所属するのではなく、自分が物に所属していくことになる。

あるいは同じように希少性を求め、少量生産の限定品を買うことによって、自分が特別限定の人間であることを証明しようとする人もいる。だからと言って、それ一つで自分自身の希少性を証明できるはずはない。そこで、そういった人は、また別の限定品を買うことになる。だが、それでもまだ証明されず、さらにまた買う、と繰り返していくことになる。

流行り物を持つことは、同時代の中で孤立していないと確認するためには効果がある。自分は風変わりな人間ではないと、強く感じることができる。しかし、自分が固有の存在であることを語ろうとするのなら、他の人と同じになりやすい流行り物を選んではいけなくなる。特別な身体を社会的に作ることは、非常に難しい。

(け)ヤッカイなことに、流行り物などに頼らずに、身体をどのような形に作り上げていくかのイメージを、個人個人がゼロから生み出すのは不可能である。それは、社会の中から探して借りてくるしかないのだ。自分がどのような人間であるかは、他者の視線を意識して、社会的に形成されたイメージに合わせることによってしか表現することができない。誰にも、自分が特別な人間

であると信じたい瞬間はあるのだから、特別な物の力で、特別な気分になって、少しでも自信を持つことができれば、楽しく生きることができるだろう。しかし、それはなかなか困難なことなのだ。

だが一方で、どんなに天才的な表現者であっても、既存の枠組みの中でしか表現できないのは当たり前のことである。文章を書く人は、日本語などの既存の言語を使って練り上げる。絵を描く人は、絵の具を使って絵筆で描く。音楽を奏でる人は、(に)ゴセンフの上に作曲し、楽器を使って演奏する。優れた表現は、既存の枠組みのどこかを乗り越えてなされる場合が多いとはいえ、だからといって、道具も、手段も、何もかもを自前で用意して表現するのは無理である。

私たちが唯一無二の存在と思っている芸術作品ですら、そうやって既存の制度や方法に、そのほとんどを頼っているぐらいだから、服を着ることによって自分が誰かを表明することも、同じように既存の枠組みに頼らざるをえない。ファッションは、人間の身体の多様性、［お］人間そのものの多様性を積極的に肯定し、多様な美のあり方を際限なく提案し続ける表現手段である。しかし、だからといって無制限に提案ができるわけではない。私たちは、街やマスメディアやネットで手に入れることのできる既存のイメージの組み合わせによってしか、日々、自分の姿を形づくることはできない。

要するに私たちは、自由意思に従って選んでいるようでいて、限られたものの中から選んでいるに過ぎない。選び方も自分で決めているようでいて、社会のルールに従っているだけだ。逆に、ファッションなどどうでもいいと思っている人も、限られた中から選ばないわけにはいかない。たかが着るもののようでいて、男らしさや女らしさをどう考えているか、社会のどこに自分を位置づけているか、どういう文化を受け入れているかといったことを、眼に見える形で示さざるをえないのがファッションなのだ。社会が提示しているものの中から選ばなくてはならない以上、それは、デュルケームが言うところの「集合意識」が顕在化したものにならざるをえない。

デュルケームは、個人の「行為や思考」と思われているものは、その類型が個々人の意識の外部、つまり社会に存在しており、個々人はそれに従って行動しているだけだと説く。多くの場合は、みずから進んで同調しているので、その強制力に気がつかないが、だからといって私たちが、集合意識に強制されていないわけではないという。(2)ファッションは、そういう集合意識と私た

ちの関係を、非常にわかりやすく例示してくれていると言える。

（井上雅人『ファッションの哲学』をもとに作成）

問題Ⅰ　次の問いに答えなさい。（配点20点）

問一　傍線部(ア)～(オ)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

(ア)　大概

(イ)　捉える

(ウ)　袖

(エ)　所作

(オ)　匿名性

問二　傍線部(あ)～(こ)のカタカナを漢字で書きなさい。

(あ)　ホニュウ類

(い)　ヨカ

(う)　ゲンガイ

(え)　ソウシツ

(お)　イシズエ

(か)　マネ

(き)　リンカク

(く)　シコウサクゴ

(け)　ヤッカイ

(こ)　ゴセンフ

問三　傍線部(i)～(v)の対義語として最も適当なものを選択肢から選び、そのカタカナを漢字で書きなさい。

(i)　決定
〔サンテイ　ケンテイ　ザンテイ　キョウテイ　カンテイ〕

(ii)　強制
〔ヨクセイ　ジャクタイ　リュウイ　ジュウナン　ニンイ〕

(iii)　貧相
〔ソソウ　フウキ　ホウリョウ　キンウン　ギョウソウ〕

(iv)　崇拝
〔ケイベツ　ジュウゾク　リキリョウ　シハイ　ブレイ〕

(v)　強化
〔クハイ　ジャクショウ　ケンイ　カンワ　キョジャク〕

問題Ⅱ

次の問いに答えなさい。なお、論述形式の問いでは、句読点やかぎ括弧などの符号も一文字として扱うこと。（配点55点）

問一 空欄 あ ～ お に入る語句としてふさわしいものは何か。その組み合わせとして最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

	あ	い	う	え	お
(1)	それゆえに	あるいは	そもそも	しかし	つまり
(2)	そもそも	あるいは	それゆえに	つまり	しかし
(3)	それゆえに	つまり	そもそも	しかし	あるいは
(4)	つまり	あるいは	そもそも	しかし	それゆえに
(5)	そもそも	あるいは	つまり	それゆえに	しかし

問二 波線部Ⓐ「ファッションとは行為なのか」とある。「ファッション」が「行為」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1) ファッションは、行為つまりその人が行っている行動を指す言葉である。そして、それ以外の「流行」などの個人の行動とは無関係な社会現象を表現しているものではないということ。

(2) ファッションは、実存主義と呼ばれる、人間に対して主体性と呼べる何かの存在を認める考えと合致する。そこで、ファッションは、それぞれの個人の絶えざる努力によって生み出されると考えることができるということ。

(3) 「模倣」という比喩が示すように、ファッションは本人の意志を必要とし、社会に共有される考えが個人を通して発露している現象である。その点で、自分の意志と無関係に同調してしまう「感染」とは異なるということ。

(4) ファッションは、個人の個性つまり人の特殊性を認めている。その一方で、そこには様々な社会的な力が作用し、主体的な選択だと思い込んでいたとしても、所属する社会の影響から逃れられない行動だということ。

(5) 特定の人のファッションはしばしば周囲の人々を動かし、社会に影響を与えるのであって、決してその逆ではない。すなわち、ファッションは、その人自身の意志・自発性によって導びかれているということ。

問三　空欄 [a] に入る文章として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1)　人間はこれまでの長い歴史の中で、実存主義と構造主義の対立を描いた様々な文学作品を世に送り出しており、その芸術性は高く評価されている。

(2)　人間は何事も個人の意思を超えた水準で決定されているという考えと、社会構造によって規定される主体性という考えの対立を意識しないではいられない。

(3)　人間はごく私的な事柄についてひっそりと考える時ですら、言語という社会的に共有された道具を使わないことには、何も考えることができない。

(4)　人間は自らの意志のもとで自由に扱うことができる言語というシステムを用いなければ、ここまで多くの人の感情に訴える作品をつくることはできない。

(5)　人間は個性や意思を排除しようとする社会的な強制力に抗わなければ、芸術的で個性的な作品を生み出すことはできなかったと考えられる。

問四　波線部(B)「衣服が『いやおうなくアイデンティティを表明』してしまう」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当でないものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1)　人は誰であれ複数の自分を持っており、自分の違った側面を語るために、服を着ては姿を確認する。その姿に満足を覚えても不満に思っても、現代の社会ではまったく同じ服を着て過ごすことは難しいのに、自分でも上手く語れない自分を、着る服が表示してしまうということ。

(2)　アイデンティティとは、生きている中で変わることがないと思える自分らしさのことであるが、ファッションによる自分語りは、時間とともに変化していく。人は、自分自身を着飾り、常に自画像を描き変え続けながら、次々に己の片りんを表してしまうということ。

(3)　その人が所属する社会の政治的、経済的な特徴、そこでの社会的地位や収入、その社会の伝統的な習慣とその地理的条件によって選ぶ服は異なる。そのため衣服は、意識するしない、好む好まないにかかわらず、その人が何者であるのかを伝えてしまうということ。

(4)　およそすべてのデザインされた工業生産品は、外界にかかわる根源的なメディアたりうる。伝えるべきアイデンティティがなければ意思疎通は成立しないように思えるが、しかし、その実は、衣服を着ることが、必然的に投票や暴動のような政治的行為になってしまうということ。

(5)　自分が誰であるかを、互いに視覚的に伝え合うことがファッションである。そうであるなら、自分を語ることができず、自分が何かわからなくても、ただ衣服に袖を通すという行為そのものがコミュニケーションを成立させ、その人が誰であるかを定義してしまうということ。

問五　波線部(C)「そういった状況」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1)　物が「言語や所作よりも深層の世界、意識化できない世界」を形づくるほどになってしまった、物でしか自分を語ることのできない悲しむべき現代社会の状況。

(2)　自分というものを表現するのに物に頼ることしかできないが、視覚的・表層的であるはずの物がアイデンティティといった内面をも示す、深みのある現代社会の状況。

(3)　物にあふれているがゆえに同じ服で毎日すごすことが社会的に許されず、自分について表現することが困難な一方で、経済的・産業的には豊かな現代社会の状況。

(4)　多くの人が物を所有することによってしか自らを語ることができない一方、そうした物が深層の世界をも形づくるため一概に否定することのできない現代社会の状況。

(5)　多種多様な服で自分を語るうちに自分でも自分らしさというものが分からなくなってしまうために、日々異なる服に着替えなくてはならないように社会的に規定された現代社会の状況。

問六　波線部(D)「表情も、仕草も、身体も、衣服も、すべての人が、その扱いに熟練しないわけにはいかないのだ」とある。それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1)　現代社会では、人間は、匿名性を取り除くために、周囲の人々と相互に眺め合う。そして、外見をきっかけに他者と対話して相互理解を深め、この理解を通じて自身や他者の個性を把握しようとするから。

(2)　現代社会では、人間は、匿名性の高い環境でアイデンティティを主張する。そのために、所属する社会の政治的、経済的な特徴、自身の地位や収入を反映した装いを積極的に選ばなければならないから。

(3)　現代社会では、人間は、日々その場の自分にふさわしい装いを身につけて、複数の自分を使い分ける。しかも日常生活を円滑に送るために、これら装いの全てが、自分を語り尽くせるものでなければならないから。

(4)　現代社会では、人間は、現実と想像の視線を踏まえ、見た目を重視し、独自の装いを身につけて個性を示そうとする。その一方、過度に周囲と異なる装いをすると、周囲と不仲になり自身も不安を抱くから。

(5)　現代社会では、人間は、自分が人々の中に埋没していないか不安を抱く。この不安を取り除くために、人々は相互の外見を実際に眺め、互いの外縁を強調させてその優劣を判定しようとするから。

問七　波線部(E)「物が自分に所属するのではなく、自分が物に所属していくことになる」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1)　自分自身の新しい身体像を提案してくれる流行の服は役に立つが、自分が特別限定の人間であることを証明するには流行の服を次から次に買い続けなければならないということ。

(2)　自分より有名なブランド品が、自分のことを語ってくれるはずはなく、人に会うたびに流行の品物を見せ、語り聞かせる自分の方が、結果として流行に貢献しているということ。

(3)　自分自身の姿を探している現代人にとって、自分が物を所有するというより、所有する自分が物へと自己同一化を果たすことによって、新しい身体像を手に入れているということ。

(4)　自分が固有の存在であることを示すために流行り物を買い求めても、自画像を描く手段になるどころか、かえって個性と存在感が流行の中に埋没するということ。

(5)　流行り物を持つことは、同時代の中で孤立しないためには効果があるが、他の人と同じになりやすい流行り物を選ぶことはできず、流行に先駆けねばならないということ。

問八　二重傍線部(1)「物に付着した意味ですら、所有者の属性へとすり替えてしまう技術」とある。それはどういうことか。本文中の言葉を用いて、一二〇字以内で説明しなさい。

問九　二重傍線部(2)「ファッションは、そういう集合意識と私たちの関係を、非常にわかりやすく例示してくれている」とある。それはどういうことか。本文中の言葉を用いて、一二〇字以内で説明しなさい。その際、「社会現象」という語句を必ず用いること。

問題Ⅲ　「ファッション」とはどのようなものか。本文の内容を踏まえ三〇〇字以内で説明しなさい。その際、「デザイン」「主体性」「自我」という三つの語句を必ず用いること。なお、句読点やかぎ括弧などの符号も一文字として扱うこと。（配点25点）

（下書き用紙）

300　200　100

（下書き用紙）

300　200　100